Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-01

ハズダの意味用法と使用実態について

陳, 秀茵

(Citation)
國文論叢,58:143-162

(Issue Date)
2021-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100477480

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477480

ハズダの意味用法と使用実態について

陳　　秀　茵

1. はじめに

本稿はハズダの意味用法分類と使用実態に着目したものである。本稿では、先行研究を整理した上で、「現実との関係」と「推論の有無」という2つの観点に基づき、ハズダの意味用法を5分類した。また、日本語教育におけるハズダの用法説明や例文提示の基礎データを得ることを目指し、書き言葉コーパスを用いて調査した。日本語母語話者におけるハズダの使用実態を明らかにするために、用例を「意味の面」と「形式の面」から整理し、特徴的な形式に注目し実例を用いながら詳しく考察・分析した。分析の結果、次の2点が明らかになった。

第一に、前方共起については、ハズダと共に用いられていると考えられるものがない（「その他」）例が70％近くを占めている。ダブルテンスについては、「ルール」タイプが圧倒的に多く、75％ぐらいを占めている。後接形式に関しては、「言い切り」が最も多く（約66％）、その次は「接続形式」である（約23％）。

第二に、多く現れた「ハズ。」「ハズダから」「ハズが」について詳しく考察した。それぞれの用法と機能について、以下の3点が解明できた。1）「ハズ。」はくだけた話し言葉的な文体の文章に、「ハズだ。」はかたい文体の文章に現れやすい傾向があり、断定を表す「だ」を用いないことによって、断定を避け、押し付けがましく感じやすい「思い込み」のニュアンスを和らげる。2）「ハズダから」で語られる事態はほとんど後件のアドバイスや推測、判断の根拠になっている。自らの推論や記憶、知識を根拠にして、アドバイスしたり、質問に対して推測した結論を提示したりする。3）「ハズが」はブログのような話し言葉に近い文体の文章で、「名詞＋のハズが」という形式で、予定どおりでなかった意味で用いられやすい傾向がある。

本稿の構成は次のようになっている。2節では先行研究を整理し問題点を指摘した上で本稿におけるハズダの分類を示す。3節では書き言葉コーパスを用いてハズダの使用実態を「意味の面」と「形式の面」から調査と整理をする。4節ではコーパスの実例を用いて詳しく考察・分析する。5節ではまとめと今後の課題を示す。

2. 先行研究及び本稿におけるハズダの分類

2.1 先行研究及びその問題点

ハズダに関する先行研究には、主に①意味用法の記述（高橋 1975，森田 1980 など）、②似た意味機能を持ったモダリティ形式との比較（木下 1997，岡部 2003・2004 など）、③日本語教育への示唆（金子 2000，太田 2014 など）、という 3 つの目的に重点を置いたものが見られる。太田（2014）で詳しく考察されているため、本稿ではハズダの意味用法（①）に関する先行研究のみを整理し、本稿の分類を規定する。他のモダリティ形式との比較（②）や、日本語教育関係（③）の先行研究は次節以降目的に応じて検討する[1)]。

ハズダの意味用法に注目した先行研究は数多くある（高橋 1975，森田 1980，寺村 1984，奥田 1993，松田 1994，木下 1997，岡部 1998 など）。そのうち、高橋（1975）の「予定や推定などきまりやたしかさの〈みこみ〉用法」と、「ナルホドソウイウワケダという道理の〈さとり〉を表す用法」の 2 種は、ハズダ研究の基礎となっている。その後の森田（1980）、寺村（1984）、奥田（1993）、松田（1994）のいずれも、大きく〈みこみ〉と〈さとり〉の立場で議論したものである。これらの研究の用法分類の関係は【表 1】のとおりである。

【表 1】 高橋1975、森田1980、寺村1984、奥田1993、松田1994の用法分類一覧

<table>
<tr><th>高橋（1975）</th><th>森田（1980）</th><th>寺村（1984）</th><th>奥田（1993）</th><th>松田（1994）</th></tr>
<tr><td rowspan="4">〈みこみ〉</td><td rowspan="2">条件からの当然の帰結として予想する場合</td><td rowspan="4">ある事柄の真否について判断を求められたとき、あるいは自分で判断を下すべき場面に直面したとき、確言的には言えないが、自分が現在知っている事実（P）から推論すると、当然こう（Q）である、ということを言う時に使われる。</td><td rowspan="4">私は当然のことと判断するという「私の思い込み」を表現する。〈記憶・思い込み・予定〉</td><td>推察
〈推理・期待〉</td></tr>
<tr><td>道理〈一般的判断・普遍的真理〉</td></tr>
<tr><td rowspan="2">条件からの当然の帰結が現状と食い違っている場合</td><td>予定</td></tr>
<tr><td>確認
〈記憶・体験〉</td></tr>
<tr><td>〈さとり〉</td><td>条件の真相を知って現状が当然の結果であったと悟る場合</td><td>ある事実（Q）について、どうしてそうなのかと思っていたら、その疑問に答えるための他の事実（P）―Pならば当然Qだと了解される、そういう事実―を知った、という状況で使われるものである。</td><td>一般的事実・法則的な関係を表現している。〈確信〉「ちがいない」ぐらいの軽い意味・出来事は存在し、照応する現実は存在しない。</td><td>〈さとり〉</td></tr>
</table>

森田（1980）は、高橋（1975）に「条件からの当然の帰結が現状と食い違っている場合」があることを加えたが、用法間の関係については言及していない。寺村（1984）は、高橋（1975）と森田（1980）をほぼ踏襲した上で詳しく記述したものである。奥田（1993）は「はずだ」と「はずだった」に分けて分類する点では、上記の３つの先行研究と異なるが、結果的には、高橋（1975）の２分類をさらに細かく分類したこととなり、それほど大きな変更点はない。また、松田（1994）は、現実の世界と観念の世界との関係という観点を大きく取り上げ、ハズダは「推論の結果や付帯状況と、それに対応する現実との関わり（文脈的展開）を強く意識している表現」だとし、【表1】のように〈みこみ〉と〈さとり〉とに二分し、「推察・道理・予定・確認」を〈みこみ〉用法の一部、あるいは派生的用法と捉えている。ただし、太田（2014）も指摘しているように、「ハズダの意味については「推察・道理・予定・確認」の４つに分類しており、現実の世界と観念の世界との関係を、ハズダそのものの分類基準としては、用いていない」という課題が残されている。

この４つの研究と大きく異なった観点で、ハズダの意味用法を分類したものとして、岡部（1998）、築山（2000）、太田（2014）などが挙げられる。この３つの研究は、本稿と密接に関連するため、以下で詳しく検討する。

岡部（1998）は、〈みこみ〉と〈さとり〉用法で解明できない例が存在していると問題提起をし、ハズダの基本的意味を「事態を理屈の上で成り立つ事態として語る」としている。その上で、現実の世界と観念の世界との関係を分類に利用することで、【表2】

【表２】　岡部（1998）におけるハズダの用法分類とその例文[2)]

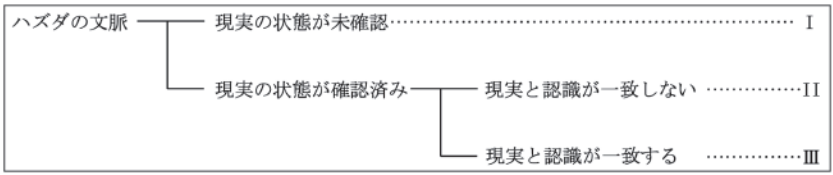
<table>
<tr><td rowspan="4">現実に成立する事態として語る</td><td rowspan="3">現実成立を未確認</td><td>推量行為有</td><td>みこみ</td><td>(1)今日は天気がいいし季節もいいから行楽地はどこも混んでいるはずだ。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">推量行為なし</td><td>予定</td><td>(2)予定では船はあと百四十三日で神戸につくはずだ。</td></tr>
<tr><td>記憶</td><td>(3)（山田さんはどこに住んでいるのかと聞かれて）山田さんは八王子に住んでいたはずです。</td></tr>
<tr><td colspan="2">現実成立を確認済み</td><td>さとり</td><td>(4)「太郎、昨日骨折したんだってさ」「どうりで試合にでていないはずだ」</td></tr>
<tr><td rowspan="3">理屈の上で成立する事態として語るだけ</td><td rowspan="2">現実との距離を意識</td><td rowspan="2">〈事態の正当性〉</td><td>食い違い</td><td>(5)おかしい、僕は徹夜で疲れているはずだ。なのにこんなに元気だなんて。</td></tr>
<tr><td>おしつけ</td><td>(6)（クジラは卵から生まれるのだと主張する人に対して）何言ってるんだ！　クジラは哺乳動物であるはずだ。</td></tr>
<tr><td colspan="2">現実との距離を意識せず</td><td>理想上の事態成立</td><td>(7)（頭の中で暗算しながら）ええと、千五百円で一万円を出したら、お釣りは八千五百円であるはずだ。</td></tr>
</table>

のように、ハズダの多様な用法の全体像を示している。

高橋（1975）が提出した「〈みこみ〉と〈さとり〉」の２分類で説明しきれない、「食い違い」や「おしつけ」などの用法を、「現実の世界と観念の世界との関係」という観点で、統一的に説明している点では、極めて示唆に富んだ研究である。一方、分類の基本に検討の余地がある点も見られる。まず、(7)は「現実成立を未確認・推量行為有」の例と考えられ、〈みこみ〉の下位分類とすることができる。次に、(6)については、「クジラは哺乳動物である」ことを聞き手におしつける以上は、（私の知識に基づいて）それを現実に成り立つ事態として考えるはずであり、「理屈の上で成立する事態として語るだけ」という主張は首肯し難い。すなわち、ハズダは「現実について語る」制限はないが[3]、話し手が「理屈の上で成り立つ事態」と考えている以上、その事態は当然「現実に成り立つ事態」と考えているということが言える。そこから、「おしつけ」は「記憶」用法と本質が変わらないと言えよう。また、(5)のような「食い違い」の場合は、話し手は現実世界と照らし合わせ、ハズダで語られる事態のほうが正当であるが、現実世界においては、成立していないということを語っている。ハズダの正当性ということは、あくまでも理屈上の正当性にとどまっているため、この用法を「事態の正当性」と言ってよいだろう。ただし、それと同時に、岡部（1998）で主張されているとおり、〈おしつけ〉と〈食い違い〉のいずれも、「現実が確認済み」であるが、ハズダで語られる事態と一致しないものである。「そのように考えれば、岡部（1998）では別の系統として扱われている「現実に成立する事態として語る」場合の下位分類として、「現実との不一致を確認済み」の場合と考えることができる」（太田，2014: 168）。このように、岡部（1998）が分類の基本を「現実に成立する事態として語るかどうか」に置くことは、正当性が欠けているのではないだろうかと考えられる。このことから、本稿は、太田（2014: 同ページ）の「現実との関係を分類の第一基準に採用すれば、より整然とした分類が可能である」という主張に同意する。

以上のように、太田（2014）は岡部（1998）の「現実との関係」という分類の観点を認めている。そうした上で、森田（1980）の３分類の立場を踏襲し、用法間の関係を「現実と認識の関係」で解釈し、【図１】に示している。

さらに「話し手の命題に対する態度」を６種に分け、それぞれにおいてハズダが何をしているのかを取り出し、それを「ハズダの機能」のタイプとしている。また、実際の



【図１】 太田（2014: 175）のハズダの意味用法分類

コミュニケーションでは、その機能には聞き手との関係によって「不審の表明」「非難」など、12種類の「伝達の効果」があることを示している。これまでの先行研究であまり注目されていない、話し手が「どんなときに」「どのように」「何のために」ハズダを用いるか、という運用面での整理と記述に主眼を置いた点において、非常に有意義な研究であり、日本語学習者の手助けになりうる。なお、挙げられた機能と伝達効果の分類が多様であり、現場への活用は工夫する必要がある。また、ハズダの使用実態が整理されているが[4)]、当時は大規模なコーパスを用いることができないため、用例の種類が限られている傾向が見られる。以上のことから、より客観性がある調査によって検証する必要があると思われる。

最後に、岡部（1998）の分類基準の一つである「推量行為の有無」を、分類の出発点にしたものとして、築山（2000）がある。築山（2000）は、まず、ハズダの用法を「推論のある場合」と「推論のない場合」に分け、それらを「推論」と「既得情報提示」としている。築山（2000）のように、「推論行為の有無」という観点を、ハズダの用法分類に利用することを、明示的に主張する先行研究は、管見のところ、ほかに見られない。ただし、ほとんどの先行研究の用法分類に、用語は異なるものの、「推論行為の有無」に該当する意識がうかがえる。例えば、松田（1994）では、「推察」「推理（推論行為有）」と「予定」「記憶」「体験（推論行為無）」に分類されている。本稿も「推論の有無」はハズダの分類において、有効な視点であると考える。

上記において、ハズダの意味用法に関する先行研究とその問題点を整理した。次の節では、本稿の分類と研究対象を示す。

2.2　本稿におけるハズダの意味用法の分類と研究対象

以上の先行研究とその問題点を踏まえ、ここでは、本稿におけるハズダの意味用法の分類を規定する。本稿は庵・高梨・中西・山田（2001: 210）を参考にし、ハズダの基本的な意味を、「論理や既存知識に基づいて考えた結果得られた確信を示す」と捉え、「現実との関係」と「推論の有無」という２つの観点に基づいて分類を行い、全体像を【表3】に示す。

【表３】　本稿におけるハズダの意味用法の分類の全体像

		１推論有り	２推論なし
A 現実が未知		A1	A2
現実が既知	B 反事実	B1	B2
	C 納　得	C1	──

【表3】のように、合わせて、大きく５種に分類する。C2が存在しない点について、簡単に説明しておきたい。横田（2002）は「「結果を表す帰結用法」においては、推量の

可能性のない既定の事実についてはハズダが使えない」と主張している。「納得」用法と「帰結」用法との根本的な違いは、話し手がその出来事をすでに知っているかどうかだけにあるため、「納得」用法の場合も横田（2002）の主張に当てはまると思われる。つまり、現実が既知で、理由・原因となる情報が新しく得られ、「だからか、なるほど」と悟る場合は、「推論なし」のハズダが用いられないということである。また、先行研究で提示されている用法との関係について、「帰結」や「一般事実と規則」は「1 推論有り」に含め、「記憶」「知識」「予定」や「思い込み」などの用法は「2 推論なし」に含めることができる。これらの用法の具体例は次のとおりである（例 9、13、14、15 は「BCCWJ」より）。

A1：（8）今日は天気がいいし季節もいいから行楽地はどこも混んでいるはずだ。（帰結）
（（1）再掲）

（9）消費者はより安いところで物を買いたいはずです。　（一般事実と規則）

A2：（10）（山田さんはどこに住んでいるのかと聞かれて）
山田さんは八王子に住んでいたはずです。（記憶）　（（3）再掲）

（11）予定では船はあと百四十三日で神戸につくはずだ。（予定）　（（2）再掲）

（12）（クジラは卵から生まれるのだと主張する人に対して）何言ってるんだ！
クジラは哺乳動物であるはずだ。（知識）　（（6）再掲）

B1：（13）「ウィーンの女性はきれいだけど、街が女性を美しく見せている部分もあるのよ。日本だって街がもう少し素敵なら、わたし達だって少しはましになるはずよ。」　（帰結）

（14）一日中靴を履いて過ごすサラリーマンで、靴下の匂いを気にする人はかなり多いはずなのに、なぜ売れないのか。　（一般事実と規則）

B2：（15）例年なら、もっと気温が低くて、ここ山地のチベットでは雪のはず。やはり温暖化なんですかねえ。　（記憶）

C1：（16）「太郎、昨日骨折したんだってさ」「どうりで試合にでていないはずだ」（帰結）
（（4）再掲）

次の節では、各用法がどのくらい出現しているか、どのような特徴があるかといった使用実態を、書き言葉コーパスを用いて調査する。なお、「帰結」か「一般事実と規則」か、「記憶」か「知識」かといった用法間の相違は論理的に考えることができ、ハズダを考えるにあたっても有効である一方、実際のデータに振り分けて分類すると、文面からでは判断不能な場合が非常に多く、話し手（書き手）本人でなければわからない場合が多く見られた。そのため、次節からは、主に【表 3】に基づき、大きく A1 ～ C1 の 5 種の用法に照らして用例分類を行う。

用例を分類する際に、現実が未知か既知かは文脈によって判断し、「推論の有無」については副詞の判断テストを設ける。日本語記述文法研究会（2003: 162）によると、論理的推論を表す用法では「当然」「きっと」や「たぶん」と、記憶の中の事柄を再確認する用法では「確か」と、その事柄の当然性を納得する用法では「どうりで」と共起しやす

いということである。本稿は、「当然」や文脈によって「おそらく、たぶん」のような「当然」よりやや確信度が低い副詞のほうが自然な例を含めて、「1 推論有り」とする[5]。「2 推論なし」の場合、「記憶」「知識」用法は、記憶の模索行為を表す「確か」と共起でき、「予定」用法は「予定では」のような表現と共起できるか、あるいはハズダが「予定だ」に置き換えられるのである。例えば、(17)～(22)のとおりである。

(17) 今日は天気がいいし季節もいいから、｛○当然｝ 行楽地はどこも混んでいるはずだ。 (帰結)

(18) 消費者は ｛○当然｝ より安いところで物を買いたいはずです。 (一般事実と規則)

(19) (山田さんはどこに住んでいるのかと聞かれて) 山田さんは ｛×当然／○確か｝ 八王子に住んでいたはずです。 (記憶)

(20) ｛×当然／○予定では｝ 船はあと百四十三日で神戸につくはずだ。 (予定)

(21) 船はあと百四十三日で神戸につく ｛○はずだ／○予定だ｝。 (予定)

(22) (クジラは卵から生まれるのだと主張する人に対して) 何言ってるんだ！クジラは ｛×当然／○確か｝ 哺乳動物であるはずだ。 (知識)

なお、本稿では、述語に接続する句末のハズダに分析対象を限り、ハズダとカタカナで表記する。否定形式「はずではない」「はずがない」、名詞用法「その／そういうはずだ」、名詞修飾「｛はずの／はずだった｝＋名詞」などは、研究対象外とする。

以上が本稿のハズダの意味・用法の分類である。3 節では、「BCCWJ」におけるハズダを、この 5 つの分類に照らしつつ考察し、以上の分類の妥当性を考えていく。また、日本語母語話者のハズダの使用実態を明らかにすることも研究目的とする。

3. 書き言葉コーパスにおけるハズダの使用実態

3.1 検索方法と調査結果

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ-NT2.2.0) の「国会会議録」以外の非コアを含む全データ (以下、「BCCWJ」) を対象にして、「中納言」を用いて短単位検索を行った。検索方法は以下のとおりである。[キー：語彙素＝筈，語彙素読み＝ハズ，品詞＝名詞－普通名詞－一般]。その結果、25,081 例を得た。得られた全用例から手作業で研究対象になるハズダの例を 18,643 例抽出した[6]。〈ジャンル〉[7]別の出現数と 100 万語単位の出現数を【表 4】に示す。

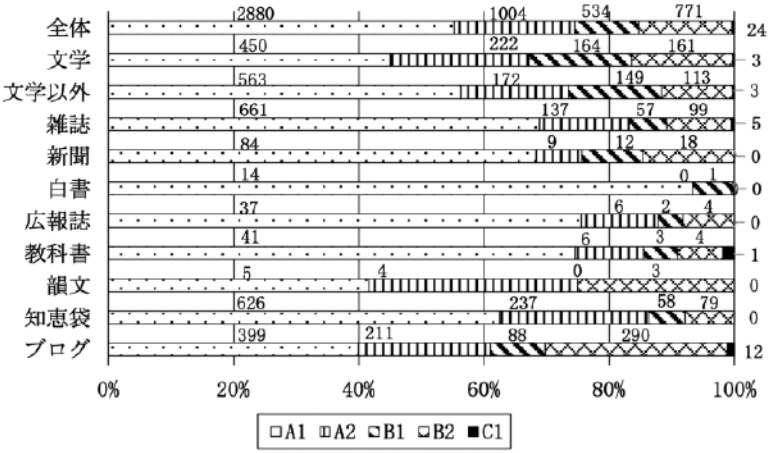
100 万語単位の出現数の上位 3 位は、「文学」「知恵袋」「雑誌」である。「文学」「文学以外」「知恵袋」「ブログ」の 4 つの〈ジャンル〉は、特に用例数が多いため、それぞれ 1,000 例をランダムにピックアップした。以下では、このようにして得られた、合わせて 5,213 例のハズダを、「意味の面」と「形式の面」から整理する。

【表４】「BCCWJ」における〈ジャンル〉別の出現数と100万語単位の出現数

分類	総語数	出現数	100 万語単位
文学	20,139,268	6,291	312.4
文学以外	42,533,142	6,910	162.5
雑誌	4,444,492	959	215.8
新聞	1,370,233	123	89.8
白書	4,882,812	15	3.1
広報誌	3,755,161	49	13.0
法律	1,079,146	0	0.0
教科書	928,448	55	59.2
韻文	225,273	12	53.3
知恵袋	10,256,877	2,459	239.7
ブログ	10,194,143	1,770	173.6
総計	99,808,995	18,643	186.8

3.2　用例整理の結果

まず、意味の分布を見る。5,213 例のハズダを、【表３】に照らし、用法分類をした。〈ジャンル〉別・意味用法別の出現状況を【図２】に示す。



【図２】「BCCWJ」におけるハズダの〈ジャンル〉別・意味用法別の出現状況

【図2】のように、全体においては、「現実が未知」の場合（A1とA2）のほうが圧倒的に多く、約75%を占めている。推論があるかどうかという観点では、「推論あり」（A1、B1、C1）のほうが多く出現した（66%）。多く現れた意味用法の上位3位は、A1（55%）、A2（20%）とB2（14.8%）である。また、〈ジャンル〉ごとに見ていくと、「韻文」ではA1、A2、B2の3つの用法に集中的に現れ、かつ割合も平均的である点においてほかの〈ジャンル〉と異なっているが、用例数が少ないため本稿では特に詳しく検討することとしない。そのほか、「文学」「ブログ」では、A1以外の用法（A2、B1、B2、C1）が半分以上を占めており、ほかの〈ジャンル〉に比べて、A1が少ないことが特徴的である。

次に、形式の面（前接と後接）から検討する。前接形式に関して、中俣（2014・2015）によると、ハズダは生産性[8]が高い項目であり、前接する動詞、形容詞と名詞の上位はそれぞれ「ある、なる、いる、できる、わかる、する」や「ない、よい、多い、少ない」「もの」といった、日本語の全般においても多く現れるものがほとんどであり、それほど特徴と言えるものがないことがわかる。そのため、ここでは、ハズダの直前に来る語ではなく、前文脈に多い語という観点で整理する。

ハズダに前接する文脈に現れた、ハズダと共起する特徴的な表現を、「理由表現」「条件表現」「副詞」「接続表現」の4種に分ける[9]。それぞれの出現状況を【表5】に示す。

【表5】「BCCWJ」におけるハズダの前文脈に多い語の出現状況[10]

種類	具体的な表現（など）	A1（%）	A2（%）	B1（%）	B2（%）	C1（%）
理由表現	から、ので、ため、せいで	326(11.3)	0 (0.0)	46 (8.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
条件表現	ば、たら、と、では、場合	635(22.0)	7 (0.7)	219(41.0)	12 (1.6)	0 (0.0)
副　　詞	本来、たしか、必ず、当然	211 (7.3)	71 (7.1)	45 (8.4)	63 (8.2)	7 (62.5)
接続表現	従って、これで、つまり	60 (2.1)	0 (0.0)	17 (3.2)	0 (0.0)	5 (20.8)

【表5】からわかるように、推論があるA1とB1用法は、「条件表現」の出現率が高く（それぞれ22.0%と41.0%）、C1では「副詞」（なるほど、どうりで　など）と「接続詞」（そりゃ　など）の使用が目立つ。そのうち、A1の場合は(23)のような仮定条件がほとんどで、B1は(24)のような事実に反する条件文が多い。

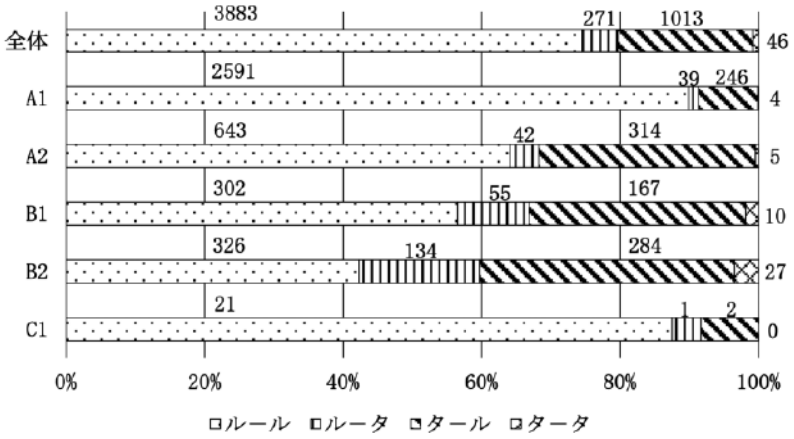
(23) 保護者の方が協力する雰囲気があれば、かなり状況は改善されるはずです。
（Yahoo! 知恵袋，2005）

(24) 中国語を話すことができたら、もっと楽しかったはず。
（新聞，ブロック紙／西日本新聞，2004）

それに対して、推論がない場合（A2とB2）は、特徴的な表現が見られない例が90%以上を占めている。そこで、各用法の特徴をより明確に示すために、先行研究でしばしば取り上げられるハズダのテンスに注目し、ダブルテンス[11]の観点から整理する。

ハズダのテンスに関する先行研究はいくつか挙げられる。それらの研究で最も注目さ

れているのはハズダの第２テンスである。ハズダと〈判断する時〉はいつであるか、それを〈語る時〉はいつであるかという観点は、高橋（1975）によって提出され、奥田（1993）で重点が置かれている。奥田（1993）はハズダを分類する際に、まず、第一基準を第２テンスが非過去形か（「はずだ」）過去形か（「はずだった」）に設けている。【図３】からもわかるように「はずだった」は確かに特殊で、反事実の意味を表す場合が多いが、「はずだ」でも同じような用法が見られるため、その基準の正当性について検討を要すると言える。このように、本稿では、ハズダのダブルテンスに注目するが、それを分類の基準とはしない。ハズダの第１テンスと第２テンスの組み合わせは、「ルール」「ルータ」「タール」「タータ」の４種がある。それに基づき、用例を整理し、結果を【図３】に示す。



【図３】「BCCWJ」におけるハズダのダブルテンスの出現状況

【図３】のように、全体においては、「ルール」タイプが圧倒的に多く、約75％を占めている。それに対して、「タータ」タイプは、わずか0.9％であり、ほとんどないということがわかる。次に用法ごとに見ると、A1とC1は、ほとんど「ルール」タイプなのに対して、反事実用法（B1とB2）は、「タ形」が含まれる例が50％以上を占めている。また、前文脈に特徴的な表現が少なかったA2とB2用法について、次のようなことが明らかになった。「２推論なし」の場合、現実が未知（A2）か既知（B2）かにかかわらず、「タール」タイプが30％以上を占めていることが特徴的である。例えば、A2を表す(25)とB2を表す(26)のような例である。

(25) ただ、この振込手数料ですが、送金の方法により金額がだいぶ違います。七十円から六百円くらいだったはず。（Yahoo! 知恵袋，2005）

(26) 清須会議で決定して誓約したことが違ってきており、政治のやり方も変わってきている。それでみんなが不審に思い、あちこちから訴えが来ているが、それは当然である。決まった通りに事がなされていれば、不満などあるはずがない。秀吉と私との間柄は、本来親しかったはずである。この上は、もっと話し合いを持ち、天下や分国中が治まるよう論議をすべきである。

（文学以外（歴史），谷口克広『秀吉戦記』，2001，学習研究社）

最後に、後接形式の面から整理する。ハズダに後接する形式の出現状況は、【表6】のようになっている。

【表6】「BCCWJ」におけるハズダの後接形式の出現状況[12)]

		A1	A2	B1	B2	C1	合計（%）
終助詞	「よ」	95	51	9	10	2	167 （3.2）
	「よ」以外	53	17	7	11	5	93 （1.8）
モダリティ形式	のだ	46	18	4	9	0	77 （1.5）
	だろう	5	5	3	7	0	20 （0.4）
接続形式	から・ので	127	72	10	4	0	213 （4.1）
	が・けど・のに	37	33	197	425	0	692 （13.3）
	～で	43	17	3	0	0	63 （1.2）
のだが		7	6	52	92	0	157 （3.0）
質問文（か、じゃない？　など）		21	15	1	6	1	44 （0.8）
引用節（と考える　など）		137	32	11	10	1	191 （3.7）
言い切り		2287	731	224	175	15	3432 （65.8）
その他		22	7	13	22	0	64 （1.2）
合計		2880	1004	534	771	24	5213（100.0）

全体において、「言い切り」が最も多く、66%近くを占めている。その次には、逆接を表す接続形式と終助詞の「よ」である。用法ごとに見ていくと、A1は「言い切り」の出現率が圧倒的に多いのに対して、反事実用法のB1とB2は「が・けど・のに」の使用が目立つ。また、モダリティ形式は「だろう」と「のだ」がほとんどである。形式と用法、〈ジャンル〉との関係については、次節で詳しく検討する。

以上のように、意味用法の面と形式の面（前方共起、後接形式）、ダブルテンスの観点から用例を整理した。4節では、ハズダの実例を用いて考察・分析する。

4. 書き言葉におけるハズダの用例の考察・分析

3節の結果を踏まえ、この節では、用例数の多い順から次の3つの観点から用例を考察する。4.1は言い切りの形の「ハズ。」と「ハズだ。」について、4.2では反事実用法を表す「ハズが」について、4.3では従属節に現れた「ハズダから」についてである。

4.1 言い切りの形の「ハズ。」と「ハズだ。」

【表6】に見られたように、書き言葉におけるハズダの後接形式に最も多く現れたのは、「言い切り」である。「言い切り」の形でハズダを用いる場合、普通体は「ハズだ。」のはずであるが、今回の調査では「ハズ。」[13]という形式名詞で終わる例が多く見られた。「ハズ。」と「ハズだ。」について書かれた先行研究は極めて少なく、太田（2014）のみ見られた。太田（2014: 208）によると、（会話では）「言い切りの形のままで「ハズダ」を用いる場合、その普通体は「ハズダ」ではなく、「はず。」とした方がよい場合が多い。特に、女性の場合、「ダ」で終わる言い方には違和感が生じてしまう」ということである。これは話し言葉に見られた特徴であり、書き言葉に関しては特に記述されていない。そこで、書き言葉におけるハズダの後接形式の特徴を考えるにあたって、「ハズ。」と「ハズだ。」に注目したい。

まず、2つの形式の出現状況を整理する。「BCCWJ」におけるハズダの後接形式の中に「言い切り」が3430例ある。そのうち、「ハズ。」は907例あって26.4%に当たり、「ハズだ。」（871例、25.3%）よりやや多い。〈ジャンル〉別の出現数を整理すると、多く現れた〈ジャンル〉の上位5位とそのカバー率（C）は、【表7】のとおりである。

【表7】「ハズ。」と「ハズだ。」の上位5位の〈ジャンル〉とその出現数[14]

順位	「ハズ。」（907例）			「ハズだ。」（871例）		
1	「雑誌」	317例	40.0%	「文学」	323例	37.1%
2	「ブログ」	274例	30.2%	「雑誌」	217例	24.9%
3	「知恵袋」	168例	18.5%	「文学以外」	203例	23.3%
4	「文学以外」	65例	7.2%	「ブログ」	82例	9.4%
5	「文学」	46例	5.1%	「新聞」	29例	3.3%
	C：95.9%			C：98.0%		

「ハズ。」は「雑誌」「ブログ」「知恵袋」に集中的に現れているのに対して、「ハズだ」は「文学」「雑誌」「文学以外」に多く出現している。そこから、「ハズ。」はくだけた話し言葉的な文体の文章に、「ハズだ。」はかたい文体の文章に現れやすいと考えられる。また、いずれの形式も多く現れたのは「雑誌」であるため、この節では、「雑誌」における形式名詞で終わる「ハズ。」と「ハズだ。」の例を用いて、詳しく検討する。

「BCCWJ」で用いられているジャンルの分類に基づき、「雑誌」におけるハズダ文（959例）の、雑誌の種類を詳しく整理する。多く現れた上位5位は、【表8】のとおりである。

【表8】 ハズダが多く現れた上位5位の「雑誌」の種類

順位	雑誌の種類	出現数	比率（出現数/959）
1	一般週刊誌	120例	12.5%
2	婦人誌	99例	10.3%
3	自動車・オートバイ・自転車	77例	8.0%
4	女性週刊誌	75例	7.8%
5	大衆文芸	57例	5.9%

【表8】のうち、「ハズ。」の出現率が高い雑誌のジャンルは、「婦人誌」（69例）と「女性週刊誌」（60例）[15]である。それに対して、「ハズだ。」ではそれほど目立つ雑誌のジャンルが見られず、「婦人誌」と「女性週刊誌」の出現数も極めて少なく、それぞれ6例と0例である。「BCCWJ」における「雑誌」のジャンルから考えると、「婦人誌」と「女性週刊誌」は、最もジェンダー性がはっきりしているものであるため、大変興味深い結果である。次には、まず、この2種類の雑誌における「ハズ。」の例を詳しく見ていく。(27)(28)は「女性週刊誌」の例であり、(29)(30)は「婦人誌」の例である。

(27) 上司・先輩の場合　年上ならなおさら、その人が知っていることにきっと興味が湧くはず。あなたの目指す目標に指針を与えてくれる存在。興味の対象が遠くても、いろいろ話を聞いてみる価値はありそう。会話のチャンスを逃さないで。（『an・an』，2002年6月12日号，マガジンハウス）

(28) D、Eの彼の場合は、趣味の世界は唯一自分が王様になれる場だったりするので、オーバーなくらいに褒めるべし！趣味の話の中に彼の光る部分が見つかるはず。（『an・an』，2004年11月3日号，マガジンハウス）

(29) Part1 春バッグ News 新しいバッグを買う前に、チェックしておきたい春の最新情報、最愛の一個選びに必ず役立つはず！（『More（モア）』，2005年3月号，集英社）

(30) 私のように、内側は適度なうるおい、表面はツルサラがお好みの人は大満足のハズ。3日めくらいから肌のキメも細やかに。透明感が出るのも早い。（『美的（BITEKI）』，2004年3月号，小学館）

(27)～(30)のいずれも、現実が未知、推論行為がない例（A2）であるが、特に根拠がなくても、発話者が自分自身の「思い込み」を示している。「女性週刊誌」では(27)の「占い」と(28)の「恋愛心理」のような例が多く、「婦人誌」では(29)(30)のようなファッションや化粧品に関する例が多く、購入を勧めるという基本姿勢がうかがえる。また、

(27)のような「占い」の例の5割ぐらいは、実著者が男性であることが注目される[16]。個人的な言語習慣も考えられるが、女性読者を想定しているため、女性に好まれる表現を用いるという意図が推察できる。

読み手を意識し、言語形式を選択する点については、野田春美（2012・2014）でも言及されている。上記の「ハズ。」は読み手を意識した表現の一種と考えられ、野田春美（2014）が分類している「〈親＝読み手〉意識」[17]に当たり、読み手との心理的距離を縮めようとしていると考える。ただし、そのように読み手意識について言及している先行研究は見られたが、読み手の性別まで意識する点に言及したものについては管見のところ見られない。

日本語のジェンダーに関する先行研究はほとんど話し言葉についてのものであるが、上記の考察から考えると、書き言葉においても女性的表現[18]が存在しているのではないかと思われる。また、書き手の性別を反映するのではなく、読み手の性別を意識し、女性語を用いる言語現象も大変興味深い。言語のジェンダー性に関して、阿倍（1998）は、日本語において、話し手の性別によって発音と形式が大きく異なっていることと、聞き手の性別によって「人称代名詞」「親族呼称」「呼称」に言語的差異が見られることを指摘している。すなわち、一般的には、日本語は話し手の性別による言語的差異が多いが、聞き手の性別による言語的差異（「人称代名詞」「親族呼称」「呼称」）は限られている言語として捉えられている。しかし、上記の「ハズ。」の考察から考えると、書き言葉においては話し言葉と異なる性質を持つ可能性が考えられる。特に、文学作品、エッセイ、ブログといった読み手の範囲が曖昧であるものと異なり、雑誌のように読者の性別がある程度予想できるものにおいて現れやすいのではないかと予測される。

また、定延（2011: 148）は、降り始めた雨に気が付いたという状況で、「あ、雨」のような女性（あるいは子ども）的な言い方と、「雨だ」のような男性的な言い方のような例を挙げ、女性が「体言の文を好む」と主張している。ハズダの「はず」が形式名詞であるため、同じような解釈ができると思われる。もし、「ハズだ」より「ハズ。」のほうが女性的表現と言えるとすれば、益岡・田窪（1992: 222）の「一般に、女性的表現は、断定をさけ、命令的でなく、自分の考えを相手に押し付けない言い方をするといった特徴を持つ」という主張のとおり、((27)～(30)のような例では）書き手はハズダで「思い込み」を示しているが、断定を表す「だ」を用いないことによって、断定をさけ、押し付けがましく感じられやすい「思い込み」のニュアンスを和らげると考えられる。

4.2　従属節に現れた「ハズダから」

4.2節では「後接形式」に3番目に多く現れた、理由を表す「から」に注目したい。考察する際には、従属節に現れた「ハズダから」に限定する（合わせて161例ある）。

まず、「ハズダから」の〈ジャンル〉別の内訳を見てみる。161例のうち、「知恵袋」の例が圧倒的に多く、約4割を占めている（69例）。次に多いのは「ブログ」27例、16.8%であり、「文学以外」24例、14.9%である。つまり、「知恵袋」に現れた数は、ほかの

〈ジャンル〉より2倍以上多いということがわかる。さらに、「知恵袋」の69例は、すべて回答者によって書かれたものである。それは、「ハズダから」の性質と「知恵袋」の〈ジャンル〉の特性に関連していると思われる。また、「BCCWJ」における「ハズダから」の後件の表現を整理すると、【表9】のようにまとめられる。

【表9】「BCCWJ」における「ハズダから」の後件の表現

表現の種類	具体的な表現	出現数（%）
アドバイス	すればいい、ほうがいい、てください　など	47（29.2%）
推測	だろう、と思う、かもしれない　など	47（29.2%）
説明	のだ、ということだ、わけだ　など	13　（8.1%）
その他	つもり、しよう、てほしい　など	16　（9.9%）
特にない	（書き手の判断）	38（23.6%）
計		161　（100%）

「ハズダから」で語られる事態に基づいて、相手にアドバイスしたり、ある出来事について推測したり、説明したりする例が多い（合わせて66%）。(31)～(33)はその例である。

(31) 知恵袋トップページの、「貢献度ランキング（総合）」ってかいてあるとこの横に「貢献度とは？」ってリンクがあるはずだからそこを読めばいいと思います。（Yahoo! 知恵袋，2005）

(32) 雅子さまの場合は、万全の態勢がとられるはずだから、なおさら安心でしょう。（雑誌，『週刊朝日』，2001年5月4-11日合併号，朝日新聞社）

(33) 謗る者はぞんぶんに謗るがよい。あざ笑う者は思いきりあざ笑うがよい。謗るもあざ笑うも君達の勝手にさせておこう。譚の神だけは、わたしの私心の無いことを知っているはずだから、他人に理解してもらおうなどとは思わないのである。（Yahoo! ブログ，2008）

そのほか、(34)(35)のような、話し手自身の気持ちや、「しよう」という表現で相手に働きかけるなどの例も少数ながらある。また、(36)(37)のような、特別な表現は見られないが、「ハズダから」が後件の判断の根拠になっているものが22%近くある。

(34) ブリザーベーションホールや、メイソンバーボンあたりも水没しているはずなので、とても心配です。（Yahoo! 知恵袋，2005）

(35) この時間ならまだオフィスにいるはずだから、今から行ってみましょう。（雑誌，『小説宝石』，2001年3月号，光文社）

(36) 政府がどんなに設備投資を促す政策を出してみても肝心の受注がないのだから意味はない。当然今後の生産は相当落ち込むはずですので雇用も維持できないのはもはや明白。（Yahoo! ブログ，2008）

(37) かなり重たいはずですから、壊れ物であれば一番下にある郵便物なんか一発で

す。　（Yahoo! 知恵袋，2005）

以上をまとめると、「ハズダから」で語られる事態は、ほとんど後件のアドバイスや推測、判断の根拠になっている。「知恵袋」の例が全て回答者によって書かれた例であることも、それに基づいたものだと考えられる。つまり、回答者は、自らの推論や記憶、知識を根拠にして、質問者へアドバイスしたり、質問に対して推測した結論を提示したりしているということである。

4.3　反事実用法を表す「ハズが」

【表 6】からわかるように、後接形式に「言い切り」の次に多く現れたのは「接続形式」である。「接続形式」の内訳を見ると、上位 3 位はガ（325 例、27.8％）[19]、ノニ（298 例、25.4％）、カラ（212 例、18.1％）[20]である。この節ではガのうち、逆接を表す「が」に注目する。ハズダの普通体に「が」が後接する場合、一般的には「ハズだが」であるが、「ハズが」という形式も少数ながらある。「ハズが」の用例数は少ない（83 例）が、意味用法と形態、〈ジャンル〉の出現状況に特徴が見られた。

83 例の「ハズが」は、全て反事実用法を表しており、そのうち、(38)(39)のような予定どおりでなかったもの（B2）が多い。そして、直前に来る語を整理すると、(40)(41)のような「名詞＋の」の場合が 50％以上を占めている。〈ジャンル〉別で見ると、83 例のうち、「ブログ」の例が 50％近くある。((38)～(41)は全て「ブログ」の例である)

(38) 昨夜は公開初日の『レッドクリフ Part Ⅱ』を観に行くはずが、直前になって行けなくなり、おまけに香久耶にとって映画よりも大事なことがあったのにそれさえも……（涙）

(39) とにかく、連日大盛況で満卓満卓連夜ワイワイガヤガヤ大忙しで……今日は、休むはずが、がお得意様と一緒に結局律へ行き働いてしまった…

(40) 当日、朝は 4 時起きのはずが、ぼやっと目を覚まして時計を見たら、4 時四十分！

(41) 病苦から逃れる道を探し求める旅のはずが、その旅さえも苦しいことの連続になってきた。

以上のように、「ハズが」は「ブログ」のような話し言葉に近い文体の文章で、「名詞＋の＋ハズが」という形式で、予定どおりでなかった意味で用いられやすい傾向が見られる。少数ではあるものの、「ハズが」は使われているのに対して、「から／ので／けれども／のに」という接続語がハズに直接つく例は 1 例もなかったことから、「ハズが」は特殊な使い方であるということが言えるだろう。この場合、「ハズが」では「ハズ」は形式名詞として、「が」は格助詞としての性質を持っていると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、書き言葉コーパス「BCCWJ」におけるハズダの例を「意味の面」と「形式の面」から整理し、用例を考察・分析した。その結果、次のことが明らかになった。

第一に、多く現れた意味用法の上位3位はA1、A2とB2である。前方共起については、ハズダと共に用いられていると考えられるものがない（「その他」）例が70％近くを占めている。ダブルテンスについては、「ルール」タイプが圧倒的に多く、75％ぐらいを占めている。後接形式に関しては、「言い切り」が最も多く（約66％）、その次は「接続形式」である（約23％）。

第二に、特徴的な形式に関して、「ハズ。」「ハズダから」「ハズが」について詳しく考察した。分析の結果、以下の3点が明らかになった。1）「ハズ。」はくだけた話し言葉的な文体の文章に、「ハズだ。」はかたい文体の文章に現れやすい傾向がある。ハズダで「思い込み」を示しているが、断定を表す「だ」を用いないことによって、断定をさけ、押し付けがましく感じやすい「思い込み」のニュアンスを和らげると考えられる。2）「ハズダから」で語られる事態はほとんど後件のアドバイスや推測、判断の根拠になっている。自らの推論や記憶、知識を根拠にして、質問者へアドバイスしたり、質問に対して推測した結論を提示したりしている。3）「ハズが」はブログのような話し言葉に近い文体の文章で、「名詞＋のハズが」という形式で、予定どおりでなかった意味で用いられやすい傾向が見られた。「ハズが」は特殊な使い方であり、「ハズ」は形式名詞として、「が」は格助詞としての性質を持っているということが考えられる。

上記のように、大規模のコーパスを用いて調査することによって、従来注目されていなかったハズダの使い方や使用実態を明らかにすることができた。一方、より詳しく考察するためには、各々の形式が頻出するジャンルに絞り、さらに用例を収集する必要がある。例えば、今後、「ハズ。」が帯びる女性性と、雑誌の特性、書き言葉におけるジェンダー性という要素について包括的により詳しい検討を行うことなどである。

注

1）　先行研究の概観は太田（2014）が詳しい。ただし、太田（2014）はハズダの先行研究を、①用法分類、②他の真偽判断を表すモダリティとの比較、③現実の世界と観念の世界との関係、という3つの観点から整理している。本稿は、「③現実の世界と観念の世界との関係」は①に含めることができると考え、一方、②の「真偽判断を表すモダリティ」以外の文法形式との比較も視野に入れたいため、異なる観点から整理することにした。

2）　【表2】は、筆者が岡部（1998: 958）に例文を加えて再整理したものである。例文はすべて岡部（1998）より。

3）　この点に関しては、先行研究でも言及され、次のように述べられている。益岡（1991: 118）は「論理的推論から得られる事柄は、あくまでも理論の上で成立する事態を表すにすぎないのであり、現実の世界とは次元を異にする」と述べており、奥田（1993: 189）は「「はずだ」をともなう文は意識のなかで進行する思考・想像の過程をえがきだしていて、現実の世界の出来事を直接的にはえがいているわけではない」と主張している。

4）　太田（2014）では、ハズダの形態的な使用実態調査は、話し言葉を中心にされており、書き言葉に関しては、主に文脈展開のタイプに注目されている。それゆえ、本稿の調査によって、書き言葉におけるハズダの使用実態を補足することができる。

5)　次のような占いの例「今週中、｛○きっと／×たしか／×予定では｝いい人に出会うはず。」は、「きっと」と共起できるが、推論の根拠が読み取れず、推論行為が行われたと考えられにくい。そのため、この場合は、話し手の「思い込み」に近いニュアンスを表すと考え、「2 推論なし」とする。

6)　25,081 例から 6,438 例を除外した。その内訳は、①ハズデハナイ 96 例；②ハズガナイ 3688 例；③名詞修飾（ハズノ、ハズダッタ　など）2,406 例；④名詞用法（そのハズ　など）152 例；⑤誤解析 86 例（はずれる　など）；⑥文法項目 10 例（「はずだ」は…など）である。

7)　本稿では、小西（2011）、野田春美編（2016）を参考にし、検索して得られた実例を 11 の〈ジャンル〉に分ける。〈ジャンル〉は、基本的には「BCCWJ」におけるレジスターに該当するが、そのうち「書籍」と「ベストセラー」は、統合した上で「BCCWJ」におけるジャンルに基づいて「文学」と「文学以外」に分ける。

8)「生産性とは、その項目がどれだけ多くの動詞と結びつくかという指標で、出現数と動詞の種類の数から算出される。これが低いものは、よく使うものを丸覚えしたほうがよいということになる。」（中俣，2014: 9）。

9)　太田（2014: 95）は、会話例において、ハズダと共に用いられやすい表現に着目し、「理由の接続助詞」「条件の接続助詞」「確信を表す副詞」「不確かな記憶を表す副詞」「逆接の接続詞」「否定の応答詞」「肯定の応答詞」の 7 種に分けている。今回の調査では、接続助詞ではないが、原因理由を表す「で」や、「場合、では」のような条件表現と考えられるもの、「本来」のような副詞なども見られたため、異なる分類にする。そうすることによって、より網羅的に書き言葉におけるハズダに前方共起する表現の特徴を導き出す。

10)「産地の力を結集すれば、燕は必ず生き残るはずである。」という例のように、「条件表現」と「副詞」が、一つの例に同時に出現している場合は、それぞれ 1 つとしてカウントする。それから、括弧内のパーセンテージは［出現数／該当用法の総数］で得られたものである。また、ここでのパーセンテージは、［表現の出現数／用法の総出現数］で得たものである。

11)　ここでは、ハズダで語られる事態の述語のテンスを第 1 テンスとし、ハズダのテンスを第 2 テンスとする。合わせて「ダブルテンス」と呼ぶ。

12)「言い切り」は文末にモダリティ形式などに後接しないもの、「その他」は「言い切り」以外の形式のうち、2 種以上ある例である。例えば、「ハズだけどね」は「接続形式」と「モダリティ形式」があるため、「その他」に含める。

13)「はず。」「はず！」「はず…。」など、形式名詞の「はず」で終わった文を、全て「ハズ。」で統一表記する。

14)「知恵袋」における「ハズだ」の出現数は 4 例にすぎない。また、【表 7】に示した〈ジャンル〉の調査用例数は「新聞」（123 例）以外、「雑誌」「文学」「文学以外」「ブログ」はほとんど 1000 例であるため（「雑誌」は 959 例）、出現率ではなく、より直観的な実数を示す。「新聞」の総数は少ないが、ほかの〈ジャンル〉より「ハズだ」の出現数が多いため、参考として【表 7】に入れる。

15)「女性週刊誌」「婦人誌」は、「BCCWJ」が用いている雑誌の種類の名前であり、本稿では深く触れず、そのまま踏襲する。

16）「雑誌」における「ハズ。」と「ハズだ」の実著者の性別の割合（女：男）は次のようになっている。「ハズ。」は 110: 84、「ハズだ」は 39: 137 であり、ほかの用例は実著者不明となっている。

17） 野田春美（2014）は、「読み手意識」の下位分類を 3 種類に分けている。1 つ目は文章全般に関わる「読み手存在意識」であり、アカデミック・ライティングの指導などで取り上げられるものである。2 つ目は「〈対＝読み手〉意識」であり、普通体の啓蒙的なエッセイで現れやすく、読み手に対してメッセージを発信しているという意識である。3 つ目は丁寧体のエッセイや有名人のエッセイ、ブログ・ツイッターなどで現れやすい「〈親＝読み手〉 意識」である。文字言語の「疎」の性質を薄め、読み手との心理的距離を縮めようとする意　識である。

18） 因（2003）で述べられているように、厳密に「女性語」と「男性語」に分けるのは難しい。本稿は、ハズダのジェンダー性を研究目的とするものではないため、張（2016）を参考にし、「中性的表現」「男性的表現」と並立する「女性的表現」という言い方を採用する。

19）「はずが」「はずだが」「はずだけど」などの形式が含まれている。

20）「はずなので」「はずだから」「はずだし」「はずのため」などの形式も含めて扱う。

参考文献

阿倍圭子（1998）「最も性差のある言語――言語の性差の多重構造」『言語』27(5)，pp.72-76，大修館書店.

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著、白川博之監修（2001）『中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

因京子（2003）「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』3，日本語ジェンダー学会（http://www.gender.jp/journal/no3/No3.html）.

太田陽子（2014）『文脈をえがく：運用力につながる文法記述の理念と方法』ココ出版.

岡部嘉幸（1998）「ハズダの用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』，pp.947-960，汲古書院.

岡部嘉幸（2003）「ハズダとニチガイナイについて――両者の置き換えの可否について」『日本語科学』13，pp.109-122，国立国語研究所.

岡部嘉幸（2004）「ハズガナイとハズデハナイについて」『中央学院大学人間・自然論叢』20，pp.31-48，中央学院大学商学部・法学部.

奥田靖雄（1993）「説明（その 3）――はずだ――」『ことばの科学 6』，pp.179-211，むぎ書房.

金子比呂子（2000）「「ハズダ」の意味と用法――意見文における使い方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26，pp.119-134.

木下りか（1997）「ハズダの意味分析――他の真偽判断のモダリティ形式と比較して」『日本語教育』92，pp.165-176，日本語教育学会.

小西円（2011）「使用傾向を記述する――伝聞の［ソウダ］を例に」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』，pp.159-187，ひつじ書房.

定延利之（2011）『日本語社会 のぞきキャラくり――顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂.

高橋太郎（1975）「ことばの相談室「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289，pp.79-

81，筑摩書房.
張夢圓（2016）「日本語の女性語について――少女漫画に見る女性語の推移」『日本文学研究』51，pp.15-29，梅光学院大学日本文学会.
築山さおり（2000）「「はずだ」の用法について」『日本語・日本文化研究』10，pp.95-104，大阪外国語大学日本語学科.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
中俣尚己（2014）『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版.
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法４　モダリティ』くろしお出版.
野田春美（2012）「エッセイ末における読み手を意識した表現」『人文学部紀要』32，pp.39-54，神戸学院大学人文学部.
野田春美（2014）「疑似独話と読み手意識」石黒圭・橋本行洋（編集）『話し言葉と書き言葉の接点（ひつじ研究叢書（言語編）第122巻）』，pp.57-74，ひつじ書房.
野田春美編（2016）『日本語のモダリティのコーパス調査報告――『現代日本語文法』の記述の検証』，学術研究助成基金助成金研究成果報告書.
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
益岡隆志・田窪行則（1992）「第５章　助動詞」『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.
松田礼子（1994）「「はずだ」に関する一考察――推論による観念の世界と、その外に実在する世界をめぐって」『武蔵大学人文学会雑誌』26(1)，pp.53-89.
森田良行（1980）『基礎日本語２意味と使い方』角川書店.
横田淳子（2002）「文末表現「わけだ」の用法――「はずだ」「ことになる」との比較」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28，pp.13-26.

（ちん　しゅういん／東洋大学国際教育センター講師）